



メールマガジン 7月1日号

梅雨のうっとうしい気候が続いていますが、皆様御健勝のことと思います。うっとうしくても、モンスーンアジアの日本にとって梅雨は必要な季節。これを乗り越えれば、もうすこしで夏休みです。

● ネットワーク活動報告

(1) 京都部会が開かれました。

6月4日、同志社大学光塩館で10名の参加で京都部会が開かれました。篠原代表からの報告に続き、嵯峨野高校の中藤先生から、教科書にはない入試問題としての国際通貨としての金の役割、教科書にはあっても理解しにくい入試問題としての外貨準備高の二つが報告されました。夏のセミナーで何らかの形で取り上げて解説したほうがよいということになりました。

また、奈良学園の山本先生からは、中間考査での経済のテスト問題が報告されました。中学三年生向けという問題ですが、日頃の教育活動が垣間見えて、興味深いものでした。

次回は、**9月24日**予定です。

(2) 大阪部会が開かれました。

6月12日、大阪同志社大学大阪サテライトで11名の参加で大阪部会が開かれました。篠原代表からの報告に続き、東京の三枝先生が作成された新しい教材「企業ゲーム」（経済広報センター刊）の検討を行いました。生徒にとって興味深いテーマで、無人島での資源配分から、分業、建築業の仕事から経済の様々な領域へと学習がひろがる内容への高い評価が寄せられた一方、すべて消化するには時間だけでなく、かなり緻密な計画が必要との意見も寄せられました。次回は、**9/25**の予定です。

(3) 東京部会が開かれました・

6月17日、日本大学経済学部会議室で、12名の参加で東京部会が開かれました。

篠原代表からの報告に続き、大阪で検討された新「ゲーム」の報告を受け、開発者の三枝先生も参加されての検討を行いました。三枝先生からは、シミュレーション、ゲーム教材は実施すればかならず成果が上がることはわかっているので、後は取り組む勇気なのだが、なかなかそこを突破できないという話をいただきました。参加者からは、前半の無人島部分と、後半を分けて全体を実施しなくても利用できるようなかたちもよいのではという意見もありました。

ほかに、小巻先生から、国民所得に関連する報告を受けました。

GDPデフレーターの出産方法や、最近発表されて、ネットワークの「オープン討論室」でも紹介されている、スティグリッツやセンらの新しい経済指標の評価など、興味深い報告を受けました。これらも夏のセミナーで扱うことが提案されました。

今回は、7月22日の予定で、セミナーの内容の最終確認が議題となります。なお、各部会の詳細はネットワークHPをご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/>

●夏のセミナーの準備進む…大阪盛況。名古屋、札幌が厳しい

東京証券取引所と共催の夏休み「経済教育セミナー」の準備が進行しています。6月はじめにちらしを関東、関西、中部、北海道の中学高校に配布しました。申し込み状況ですが、大阪は中学を中心にかなりの参加が申し込まれています。

東京中学、東京高校は昨年にくらべるとやや出足が鈍いということです。

名古屋、札幌に関しては、かなりまだ反応が少ない状況で、何らかの補強策が必要のようです。夏休みとはいえ先生方が多忙になっていることに加えて、最近では、各種の団体が同じ時期に似たようなセミナーを開催していることもあり、参加教員が分散しているのも原因との見方もあります。

現役の先生方だけでなく、教職大学院生や教職志望の学生などにもちらしを配布し、参加を募る方法なども検討され、すでに東京学芸大学や早稲田大学で実施されています。このマガジンをお読みの先生方も、よいアイデアや情報があればお寄せください。

●他の団体との連携など

ネットワークの活動と他団体の連携が進んでいます。

一つは、今年の夏 8 月 5 日、6 日に東京（日本大学経済学部）で開催される全国公民科社会科教育研究会の全国大会に、全面的な協力を行なっています。ネットワークからは、5 日に大竹副代表の講演があります。6 日には、入試問題のシンポジウムが行われ、篠原代表、新井、上原、吉田の各先生がシンポジストとして登場します。

もう一つは、経済教育学会との連携です。

9 月 25 日に京都橘大学で開催される、経済教育学会の全国大会に、自由論題として、篠原代表と新井が「現職教員向けの経済の教育」をテーマに発表します。また、新井を代表として、金子、杉田、吉田、松井の 5 名で「大学入試問題と高校教育」をテーマとした発表も行います。

このような形で、経済教育のプラットフォームとしてのネットワークの活動がひろがりつつあります。

●授業のヒント 新しい経済指標

新しい経済指標をつくるべきという提言の本が出版されています。

「オープン討論室」に投稿された宮尾先生の文章をもとに紹介します。

授業でも扱われるとよいかもしれません。

本のタイトルは、『**Mis-measuring our lives**』（生活水準の誤った測り方）です。著者は、ノーベル経済学賞を受けた **Joseph Stiglitz**、**Amartya Sen** の二人の経済学者とフランスの統計学者 **Jean-Paul Fitoussi** の三人です。

The New Press (New York, London) という出版社から 2010 に発行されています。この本は、昨年 9 月 24 日にパリで発表された、生活水準の計り方に関する国際的な委員会の提言をまとめたものです。

この委員会は金融危機がグローバルに広がりつつあった 2008 年初めに、サルコジ仏大統領の呼びかけで作られた「経済活動と社会発展の測定に関する委員会」と名付けられた国際的な委員会です。内容的には、従来型の GDP 中心の経済活動の測定方法に異議を唱え、もっと所得分配や生活の質や社会的に望ましい活動を高く評価するような測り方を示唆するものになっています。

特に、まとめとして以下のような提言を行っています。

- 1) 生産よりも所得や消費を評価すべき
- 2) 家計の視点を強調すべき
- 3) 所得や消費に加えて資産も考慮すべき

- 4) 所得、消費、資産などの分配をもっと重視すべき
- 5) 所得の定義を拡大して、市場以外での活動も含めるべき
- 6) 生活の満足度を左右する社会、政治、安全などのレベルを測るよう
すべき
- 7) 不公平をできるだけ包括的に測るための生活の質の指標を導入すべき
- 8) 個々人の生活の質を調べてそれが政策につながるような工夫をすべき
- 9) 生活の質をできるだけ多くの側面で捉えるような統計的な努力をすべき
- 10) 生活の質を客観的および主観的に測るような統計的な工夫をすべき
- 11) 大きなショックが来ても持続可能な幅広い測定方法を採用すべき
- 12) 持続可能な環境に関する指標は特別な注意と扱いをすべき

これでわかるように、国民所得統計の限界とされている市場価格で計算された金額しか集計されないという特質を、なんとか超えようとする提言です。この種の試みは、日本でも旧経済企画庁がNNW（国民純福祉）として作成したことがあり、最近ではグリーンGDPという形でも試みられていて、教科書に掲載されて、入試でも良く出されている項目です。

同書では、具体的な開発はこれからとなっていますが、はたしてこの提言が実現されるか興味深いところです。まだ、翻訳がでていませんが、小型版130ページあまりの本ですから、アマゾンなどで現物を入手して読まれるのもよいかもしれません。

編集後記（みみずのたはこと）

復刊2号をお届けします。この一ヶ月のネットワークの活動とこれからの予定を中心にまとめました。話は変わりますが、6月は私の誕生月です。私と同年同月同日、つまり全く同じ星の下で生まれた人間は何万人といるでしょうが、一人忘れがたい人物がいます。

その人物は、すでに鬼籍に入っています。それも特殊な死に方をした人物です。その人物の頭文字はN. N. です。興味のある人は調べてみてください。経済格差が問題になり、生活面や環境などから豊かさを問い直せという主張が世界的にでてきている昨今ですが、極貧の中に生まれ、犯罪でしか自分のアイデンティティを自覚できなかったN. N. の軌跡を辿ってみる時、日本社会の変貌の大きさに驚くばかりです。（新井）

